

松田権六書簡

北村仁美

平成18年度、当館はじめ各地を巡回して開催された『漆芸界の巨匠 人間国宝 松田権六の世界』展の際に、《蓬莱之棚》の当初の所蔵家で、松田権六（1896–1986）の作品のコレクターであった方のご遺族からご提供いただいた松田権六の書簡について、同展図録でその一部を紹介した⁽¹⁾。図録では紙面の都合上、《蓬莱之棚》制作前後の書簡に限定せざるをえなかったが、これらの書簡は松田権六の一次資料として貴重なものであると考えられるため、ここにあらためて全書簡を掲載する。

書簡は全26通で、昭和14年から昭和59年の間に送付されたものが含まれている。ほとんどが松田権六からコレクター、加藤清一氏宛で⁽²⁾、その内容は礼状から制作の進捗状況を伝える近況報告に至るまで多岐にわたる。全体を通読してみると、手紙がしたためられたその時その時に、手がけていた作品や取り巻く制作状況に対して松田が感じ、考えていたことが率直に語られていることがわかる。例えば書簡2においては、日本郵船で手がけた乾漆のパネルに関して、使用した材料についての詳細が述べられるとともに、その作品を松田が歴史のなかでどう捉えているかに対しても言及がなされている。このことから、松田がはっきりとした歴史意識のなかで自身の制作を進めていることが明らかとなっている。こうした点一つをとっても、これらの書簡は作品・作家研究にとって得難い資料である。また書簡には、新村撰吉（1907–83、図1）や室瀬春二（1911–89、図2）ら松田権六に師事した、あるいは交流のあった漆芸家たちや、陶芸家の板谷波山（1872–1963）、彫金家の清水南山（本名亀蔵、1875–1948）、さらに松田の出身地としてゆかりの深い石川県、



図1：新村撰吉《漆皮盤》1960年 当館蔵



図2：室瀬春二《秋苑文飾箱》1970年 当館蔵

旧加賀藩前田家第十七代当主の前田利建（1908–89）といった名前が見られ、その人脈の拡がりを窺うことができる。折々に出された礼状には家族の喜ぶ様子が書き添えられ、父としての松田の素顔も垣間見られる。

松田権六の語るところによると、加藤氏とは新潟県長岡市内の美術愛好家によって結成された「風羅会」という会を通して知り合ったようである⁽³⁾。最初期の手紙の日付から推測するに、恐らくそれは戦前のことで、以後およそ半世紀にわたってその交流は続いたことになる。作品の制作という点でも、そして美術品の所有という点でも困難な時代であった戦時中に作られ、戦渦にのまれることなく今日に伝えられた《蓬萊之棚》に関連した書簡が、全体の中心をなしているが、一連の書簡を読むと、まさにこの作品が制作者と所有者とを強い絆で結びつけていたように思われる（図3）。制作や取り巻く環境について克明に綴られた文面から、当時の松田権六の姿が鮮明に浮かび上がってくるが、それは、その背景に手紙を宛てた主であるコレクターとの並々ならぬ信頼関係があったからに他ならない。書簡をご提供いただいたご遺族の御厚意に対して、この場を借りてあらためて感謝申し上げます。

思い出深い「蓬萊之棚」の内部を懐かしげに見入る松田さん（左）。右は最初の所有者、加藤清一さん



図3：北国新聞（1986年1月28日）より

註

- (1) 拙稿「松田権六書簡—『蓬萊之棚』制作のころ」（『漆芸界の巨匠 人間国宝 松田権六の世界』展図録、毎日新聞社、2006年）
- (2) 例外として1通、松田権六に師事し、《蓬萊之棚》（現在、石川県立美術館蔵）の制作を助けた大場松魚（本名勝雄、1916– ）によるものがある（書簡11）。これは《蓬萊之棚》の制作にまつわる内容を持ち、松田の書簡と併せて読まれるべきと考え本稿においてともに紹介する。
- (3) 松田権六「権六の世界 26」（北国新聞、1986年1月28日）。また、風羅会については以下の図録を参照した。『コレクター・駒形十吉の眼』（新潟県立万代島美術館、2003年）。ただし風羅会のメンバーとして、加藤氏の名前の記述はなく、会との実際のかかわりについて詳細は不明である。

凡例

1. 各書簡は、本稿での通し番号、差出人（住所）、受取人（住所）、日付（消印）、書簡の形態、備考、本文の順に記載したとくに記載がない場合の受取人は加藤清一氏、また情報がない項目は - (ハイフン) で記したが、住所に関しては都合により記載を控えた箇所がある
2. 記載は年代順、ただし送付の年が不明なものについては、差出人住所、内容等から総合的に判断して可能性が高いと思われるところへ配置した（書簡6および23）
3. 同封された手紙には、枝番号をつけて示した
4. 書簡はすべて縦書き、とくにことわりがない限り手書きによる
5. □は判読不能文字、[]は編者による補足、また旧字は新字に改めた
6. 本文中に記載のある日付、署名はすべて末尾で統一し、捺印のある場合は（印）で記した
7. 書面先頭、あるいは末尾に書かれた宛名は省略した
8. 読みやすさのため文中に使用されているカタカナは、漢字あるいはひらがなにした箇所がある
9. 明らかに誤字と思われる部分には（ママ）を付した

1

松田権六（東京豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和14年9月30日（14.10.1） 封書

拝啓 時局下高堂 益々以て
御健勝の段 奉慶賀に極候
陳者本日誠に見事なる
梨果御恵与に預り美味し
く頂戴仕り候 茲に御厚情の程
以書中不取敢御礼申上候度
斯如に御座候 敬具

九月三十日
松田権六

2

松田権六（東京豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和15年6月30日（15.7.1） 封書

拝啓 新造船 春日丸一等社交室の壁を
乾漆薄肉にて造り 全面を黄金にして其上に漆仕上
げして見たもの 写真一葉別便お送り申上候
漆 全使用量 三十六貫匁
布 全量 四千尺余
作業期間 六ヶ月
以上 漆工史上一番大きな
乾漆と存じ居り候
松田権六

3

松田権六（東京豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和16年1月13日（16.1.13） 封書

奉新春祝

只今は何と珍ら[し]く見事に大きな出来
栄の梨果一箱わざわざ御恵送
に預り御厚情誠に恐縮の次第にて有難
頂戴仕候 茲に厚く御礼申上候
今日まで美味に保存されしこととて大そう
結構に頂き申候 拙宅の子供等□んな
大きなものは見たことなしとて非常に喜居候
不取書中 御礼申上度斯
如にて御座候 敬具

皇紀二千六百年^(ママ)一年正月十三日

松田権六

4-1

松田権六（豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和16年3月18日（16.3.18） 封書

拝啓 先日は御光来忝く候
其節お話の棚の件につき同封の如き
来信有之候 一応御覧願度候
本日お写真鑑かにお受け申し候
其方面の様子を探って見ることに致可候
不取用々お返事のみ 勿々不昧

三月十八日

松田権六

4-2-1

新村撰吉（金沢市泉旭町二ノ七三） 松田権六（東京市豊島区池袋二ノ一〇二六）
昭和16年3月14日（16.3.□） 封書 書簡4-1同封の手紙

拝復 先生には益々御多祥の□大慶至極に

存じ候
陳ば昨夜先生の御芳墨に接し早速
御手紙持参 谷村へ伺い真意を正し
申し候 父の申分に依れば実はあの三万八千円の
値は御来訪せられたる人と共に双方原品を
前にして睨合したる価格なれば何等かけね
のない本当の処と申し居候
只今御返事認め中 谷村父より手紙
参り候 依つて此処に父の申分同封致し置候
昨夜と同様の言葉に候間 其辺御諒察
願上候 先は取急ぎ御返事申述度
如斯に御座候

草々
三月十四日
新村撰吉 拜

二伸
然し同封の父の手紙は斯様に申居候共昨夜参上の節
話中より推察すれば少々の処は幾分勉強の
余裕ある様に見欠^(ママ)られ候

4-2-2

- (-) - (-) - (-) 便箋のみ 書簡4-2-1新村撰吉同封の手紙

舌代
昨日は失礼仕候 御風邪御大
事に成度候
御話の虎溪三笑樞については
大切に保存し来り候へ共
此樞の真価をほんとうに
認めて将来へ伝えてくれる
人が出たとすれば 田舎にうず
もらせて置くよりも中央へ
出して 樞本来の生命

を發揮させるのも 好ましき
事と存候間 此上は運命
開發の氣と相成べく存候
代価については 最近東京
に於て 前山と云ふ御方の入札
最中 当地能久に伝來した
昔 吾々の手にかけたる東山時代
と云ふ小形の手箱が此間
三万三千に売れて居ります
事から考へても 手箱は之等よりも
上がいくらでもあります
櫛は上が 一寸 あるとも無いとも
言はれません所に妙味があり
それと 之とは同日の談に非ず
とも存候 依て三万五千は
安いやうに思居候
 あまり安ければ田舎にうずもれても
 此まゝの方がよろしく候
櫛本来の価値を認めて
引取って頂く方あればよい
と存居る次第に付 【以下、切取り】

5

松田権六（東京市豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和17年6月26日（□.6.28） 封書 印刷
物1枚同封

謹啓 時下入梅の節御尊台愈々御清祥
□□□太慶存上候 陳者不肖病中に度々
御見舞頂きのみならず誠に結構なるものを頂戴
仕り御厚情の程忝く感謝に不堪乍延引本日
茲に御書中御礼申上度斯如御座候 敬具

六月二十六日
松田権六（印）

二伸 清水亀藏先生に一昨日面談の折兼御依頼の作目品取かゝり居る由御座候

[同封印刷物]

発病以来の御無沙汰を謝す

発病 厳寒の夜昭和十七年一月二十七日午後十時頃、自宅に帰つて間もなく突如として多量の吐血四回に及ぶ。その間僅か五分、一挙にして精神朦朧、暫時不覚の内に過ぎた。田口健次郎先生より胃潰瘍としての応急手当を頂いたのは一時間以内であつた。この予想しない出来ごとに、普段は胃腸こそ丈夫な積りでゐたので、実に青天の霹靂でした。立て続けに吐いて止みさうにない堂々たる勢の瞬間は全く夢中である。敢て苦もなく又生の愛着もない。漸くにして生きてゐたことが寧ろ不思議に感ぜられた。胃部の苦痛はそれから後である。

入院 発病三日目に慶応大学病院別館に移つて、大森憲太先生始め他の方々にも御厄介になり一ヶ月余り過した。入院生活は初めてであるが、想像したより気分の良くないものである。たゞ設備と食物とが、季節と時局柄、自宅療養よりも私の場合は好都合といへた。世間には胃潰瘍の患者も案外多いことを、入院して始めて始^(ママ)めて知つた。しかし、その症状必らずしも一様と限らず、私の如きは発病前の自覚症状として殆んど感じない、例えば胃酸過多、胃痛、食欲不振などその他この病氣通有の一般的前知症状は何一つ感じなかつた。寧ろ天ぷら類が好きで、食量も人一倍健啖の方でした。畢竟医師から承つた臨床上のお説の内で、自分の胸に一番領づける原因は、厳寒の折毎日外出先での食べものに、舌を焼く程の熱いものを摂つて、身体を暖めようなどと考へてゐたこと、及びその健啖が祟つたものと思はれる。

湯治 病院はどの部屋も常に満員で、私の退院も病院側から催促された形であつた。そこで自宅に帰つて療養することにしたが、この時は幾分恢復したとはいへ未だ体重なども二貫余り減つてゐた。それに入院中から度々強度の痔が出る様になつてゐたので、湯河原温泉に一ヶ月ばかり湯治に出掛けた。ところが、この町と旅館は毎日込み合つて、入り代り立ち代り如何にも騒々しいが、一向病人らしいものは、見当らない。自分には、何処かもつと静かな落ちついた

他の温泉へ転じようかと考へてゐた。それが何と四月十八日の昼である。突如として、けたたましくサイレンが鳴つた。空襲警報である。人々の緊張は町から村に、村から山に隔々まで行き亘つて、急に世界が一変した。この日の夕方になると、町には人影が見えなくなり、私の旅館にも客がゐなくなつた。翌日になつても新しい浴客は一人も来ない。手不足で小さなこの旅館でさへ百人も雑踏してみたらうが、遂に残つたものとして僅かに私を加へて三人になつて了つた。お蔭でそれ以来本当の湯治の気分が出て、何事も静かな山間の湯治場に変り果てた。谷間に啼く鶴鴿の声も、新緑萌えいづる山々に溪流の響きも、はじめて心静かにわが楽しみとすることが出来た。この時分から日一日と身体もよくなるので、時折散歩に出掛ける様になつた。

お願い 医師から胃潰瘍再発のこと、その他細々注意がある。私の胃の工合は未だ普通にならず、簡単な下痢や胃痛の様には全快が急げない。そこで医師からの懲慥でもあるが、当分の間、今まで関係した諸団体や、色々な会のお世話をやくことなどは遠慮させて貰ひたい。又依頼の製作にもお断りの御無理を願つたものもある。その他にも、今暫く保養のため、二、三のわがまゝをさせて貰ふ積りでゐる。これらがお願いである。

私の病中に、御多用の折わざわざお見舞下された御尊台の御厚情に対し、誠に忝く存じ居る次第にて、茲に厚くお礼申し上げます。当時即刻お礼の御挨拶申上ぐべき筈なれども、何分専心静養に努めさせて貰ひましたことを、特に御容赦願ひたい。お蔭で、今後尚氣永に摂養すべきものありとしても、只今は余程快方なれば、今月二十二日より学校へも出勤する様になつたので、一先づ発病以来の経過を述べ、兼ての御無沙汰を謝し、御礼旁々御挨拶と致したい次第である。末筆ながら追々向暑の折御尊家皆様の御健勝を切にお祈り申上げる。

昭和十七年六月二十六日
松田権六

6

松田権六（ - ） 10月13日（ - ） 便箋のみ

拝啓 本日 只今二十世紀
梨果の誠に見事なるも忝
筥御恵送に預り有難く御礼申上候
荷造一切完備 内容も無事
にて誠に新鮮に御座候 茲に不敢取
以書中御礼申上候 文展御観覧
の折御利用下され度候 不肖病後の
故未製作なし不申候 勿々不昧
十月十三日
松田権六

7

松田権六（東京都豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和18年2月21日（18.2.21） 封書

謹啓□寒の節愈々御健勝御奉公の恩義誠に邦家の為めお慶に不堪候
降而不肖其後お影様に到って健在日夜棚の完成に努力中の処漸く進捗
せしも尚未完に有之次第に御座候 それと云ふも最初の予定以上の色々の事を実行する為めに
斯如く相成申し候 明日とも知れない命なれば最後の一作になっても良いと考へて努力
中 遂々 日月の経過早きものにて向後約一ヶ月の内に完了見込みの予定に御座候
幸ひこの頃は身体の工合非常に好調子体重も一貫勿増し製作が何より愉快
にて一生懸命の次第にて御座候 一筆近況認め申候 勿々不昧

二月二十一日
松田権六

8

松田権六（東京豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和18年10月19日（□.□.19） 封書

冠省御尊翰多謝 益々御勇健にて時局下国
事御多端なる御日常に渉らせられ誠に邦家
の為慶祝至極と存上候 何卒一層御勇奮の

程御祈申上候 次に拙作を御高覧頂き候趣きにて
光栄に存じ候 何れ拝眉の節御高評拜聴申度候
扱而下絵の件は 不肖何時もの事ながら何等保
存心無之候為 製作の過程に於てその都度工夫
努力する程度の場合多くして完全なる下絵と申す
もの無之次第に御座候 動物園での写生及構想
数枚それも人様に御覧に入れる程のものには御座無候
拙宅へ今後御光臨頂く折にでも ありのまゝ御高覧
願度く存候 何れにしる全く御話にならぬものみに
て御座候 完全なる下絵を作成する場合も無之とは
不申候も大底^(マ)の場合はほんの二、三寸程度の構
想が根本をなし居候 不肖は兼て申上居候通
り社会的運動は今後共一切なさゝる積りにて只々
芸道精進に直進する積りにて御座候間何
卒今後共よろしく御鞭撻御声援願上候

十八年十月十九日
松田権六

追伸

大患以来何に彼にと御高配忝なくお影にて只今も
健康にて久し振りにて一作を発表し得たるは全く御恩と存じ
乍書中茲に感謝の意を表申候

9

松田権六（東京都豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和18年11月23日（18.11.23） 封書

拝啓 愈々決戦下何より有意義なる御日常に御奮闘の御尊台は是非とも
御健勝にお過しの事と遙かにお祈り申居る次第にて御座候 降而小生事
暫らくお影様で健康なりしも 遂に先達お目にかかりしその翌々日あたりから風邪気味となり
色々注意して見たれども到々本物になって終ひ遂ひに ねこんで終った様な次第にて御座候
今回の風邪は少しも発熱を俱はずも咽喉を極端に害し呼吸は夜昼を通じて困難
となり且って経験しない程度のものにて候 本日は余程良くなったので起きて見たものゝ
数日振りで何となく元氣も無之候 昨日は文部大臣 美校へ見へられるので急電の用
で一寸出掛けて見たが矢張り晩になると良くなかったことがはっきりする様な始末に候 今日は

根津美術館秋季の展示の最後の日なれば何うしても見たくて今朝からうずうずして
 るが家族に止められてゐる始末に御座候
 扱而 素人の色紙漆画は献じ申候間壁間にて御利用の際は光栄と存申候 次に
 文展出品の棚は只今まで全く代賞の点を考へておらず 全部完成するまでは一意専心
 只製作あるのみの心情に御座候 あの棚は是非とも不肖の作中の代表的なものにまで
 成功させる決心の元に全力を傾注してゐる次第に御座候 幸ひお影様にて健康の許す程度
 であそこまでこぎつけられ 未完乍ら出品せし処 先輩及第四部の各会員諸先生方々
 から望外の激励を寄せられ居る矢先きにて 例の硯箱も表面だけを完成して文展
 最終日の二十日の朝会場に持たせてやり一日だけ展示せし処 之れ又身に余るお言葉
 を頂く向きも有之候 御尊台の御日常の如き国家重大なるときに於ける有意義
 なる御生活に較ぶれば全く天地の相違なれども今は只々第一線将兵の御苦勞を
 しのびつゝ己が天分とする専門に向つて一意魂を打ち込むの外なく 又明日といふ
 命の保証もし難い帝都爆撃下の実相を思ふとき 誠に安如たり得ないと同時にせめて
 作家生活を永年の間 この皇土にありたるものとして最後の一作をこの地上に残したい
 ものといふ切願から発見したものが今回の作 飾棚にて御座候 本当に完成するまでには尚
 数十日間は要するものと存ぜられ それまで生きてゐるや否やも明言出来ない様な時局下
 のことなれば 代賞の点はお手紙を拝見したについて臥床し乍ら考へて見ようともしました
 が何うにも そこまで考へが進み不申候 甚だ御意に添はないかも知れないが目下完成
 を急ぎつゝある場合なれば 完成のとき お伝へ申可く間 其節御高覧の上 お気に召さ
 ば御取り上げの程伏して御願申度右ありのまゝなる心情一挙病床より御送申上候

匆々不昧

十二月(ママ)二十三日

松田権六

10

松田権六(東京都豊島区池袋二ノ一〇二六) 昭和19年11月13日(19.11.14) 封書

拜啓今度御参邸申候折は何に彼と
 御品不足の際にも拘らず 色々とお心入り
 の御もてなしに接し誠に御厚意を感
 謝し恐縮千万に存居申候 茲に御書中
 厚く御礼申上候 尚種々 おみやげなど御
 恵与に預り 重ね重ねの御志は有難き
 幸にて遠慮もなく あまへて持参候処家族の

満足は非常なものにて御座候
蓬萊の棚も御尊邸に納品される事は
誠に御縁あつての事と存じ深く謝し悦居る次
第にて御座候 空襲必至の都下に在る間は警報
毎日心配と相成居申候へども 只今は気軽な心境と相
成申候 冷寒の節わざわざ御見送り下され恐縮
に不堪候 お影にて車中は初^(ママ)めよりこまず 清水とんね
るを境として晴天にて御座候 帰宅後頂戴のおにぎり
其他の御馳走を家族共に頂戴申候 茲に不取取
御礼御挨拶申上候処斯如にて御座候

匆々頓首

十一月十三日

松田権六

若松御主人様より不肖不在中に来信有之
只今手紙を差出し申上候

11

大場勝雄（東京都豊島区池袋二ノ一〇二六 松田権六様方） 昭和19年11月14日
（19.11.14） 封書

謹啓

氷雨降る昨今 御尊家御一同様愈々御健勝之段
慶賀し奉ります 小生儀昨夜八時無事帰京致し
ました故他事乍ご放心下さい
扱此之度は再び参上致し長の間亦々身に余る御丁
寧なる御もてなしに接し御心入の程誠に有難く
厚く厚く御礼申上げます 蓬萊之棚も予定通り
見事に完成致し日頃松田先生の至高なる芸道に対
する信念を余す処なく発現したる稀なる大作の事とて
全く喜びの外はありません 心から御祝ひ申上げる次第
で御座います お陰様で小生も最初より最後迄
御手伝ひの光栄に浴し一生涯を通じての尊い想ひ出と
なり此之上の幸福は無いと存じ居ります

三度長岡の地を訪れる機会があるかないかは分かりませんが
 蓬萊之棚を想ひ御尊家様の御高情の程を
 偲び明るい追想にふける事も度々と存じ居る次第
 で御座います
 帰路は小千谷附近より一面の銀世界と変り驚愕致
 しました 雪国に育った者の雪に驚くのも如何かと存じ
 ますが思わぬ時とて一驚致した様な訳であります 車
 窓より毎年毎年見馴れた景色ではありますが心楽
 しく又有名な清水トンネル附近の秀麗なる秋景を
 賞でつ、元気帰着する事が出来ました
 誠に至らざる若輩の事とて滞在中は何かと御迷惑
 の多かった事と存じ恐縮に思ひ居ります 何卒此之点宜
 敷く御了怒下され度 尚今後共何分にもよろしく
 御高情御高導下されたく伏してお願い申し上げます
 末筆乍御尊家御一同様御揃ひ愈々御自愛
 下されたく祈念申し上げます
 先づは取あへず御礼申し上げます

敬具

十一月十四日

大場勝雄

12

松田権六（東京都豊島区池袋二ノ一〇二六） 昭和20年3月15日（20.3.□） 封書

拜啓只今書翰拝誦仕り候 愈々御健勝慶賀に存上候
 山内君が橐を昨日拙宅へ届けて呉れたので早速着手致可候
 扱而 赤坂のお邸には至近距離に爆弾落下しも亦今回
 の夜間空襲に際しても共に御尊邸には御被害なき由 何よりと存候
 拙宅方面に於ては池袋駅と護国寺との中間に於て数百軒の火災
 を生じたのみの程度に有之 只今までは大した事無之くも而し明日
 のことは更に保ち難きことを思へば全く不安の限りと存ぜられ申候
 不肖関東震災の大雲煙を良く見詰め記憶深き次第なるが今回も全く
 同様なる雲煙が中天高く不可思議な現象として現はれたものにて その時
 不肖は拙宅の二階から午前三時頃望見して之れは実に容易ならぬことに

相成ったと深く憂慮せしものにて御座候 B29の底空^(ママ)にして大きな姿を
頭上に幾機も幾機も送り迎へるの心境と云ふものは 生きた心地には御座無
く実に彼等の悠々悠々たる投下物には地獄の世界に一変したと思われ申候
加ふるに彼等が空襲を初^(ママ)めた頃から 火災が沈火^(ママ)する頃までの間 烈風吹きざ
さみ 沈火^(ママ)と同時に烈風も止んで終ひ風は何事もなかったかの様な静
閑な世界に返って誠に神風には非らずして 悪魔の風にて御座候

恐らく百万以上の罹災者を数へるにあらずやと思はれる次第にて御座候
死傷者又尠からざるべしと存居候 而して近代耐火建築も亦殆んど
物の数たり得ず 白木・高島・安田・浅草松屋其他類焼にて下町
一帯は猛火に包まれたものにて候 次回の空襲には残余山手方面を
同様な運命たらしむることと存申候 浅草観音堂・国技館・上野不忍池之
弁天堂・帝劇・海上ビル・等は殆んど同時に焼失に候

只 不肖の考へより観るに関東震災のときと比較すれば一般罹災者
が秩序よく行動してゐる様に思はれる点があり 各駅に於ても混雑の程度
が割合いに尠い様に見えること等に御座候 而して逆に 罹災地区にあらざる
山手方面が却て混乱の様に見へ申候 不日山手方面も同様な運命になる
ことなればといふ考へがある為めかとも存申候 事実不肖などもこの次は
必ず山手が罹災するものと感念^(ママ)致居候 日本の恐らく十万以上の都市は彼
等の攻撃目標たるべく何れは時間の問題かと存居申候 一億奮闘のネバリはこれから
となるべく戦争はいづれ我慢の仕合と存申候

拙宅では今更疎開も出来ぬ様な時の情勢になった為め大切なものは目下庭の土中に埋没することに
努め居りいざといふ時は身一つで罹災を覚悟する次第にて御座候 棗が不肖最後の作になるかも知れず
銘が出来次第長岡の方へ送りませうと存候 如何が御一報お待ち申候

三月十五日

松田権六

13

松田権六(金沢市下新町五七 沢田方) 昭和20年5月24日(20.5.25) 封書

拜啓 本朝五月五日附 御親書正に拝見いたし御見舞
の程厚く御礼申上げます 其後は何から申し上げたらよいや
ら思ふ程に有之□地に申上げます

1. 四月十三日 夜間の空襲にて拙宅も全焼したるも幸ひ家人は

無事にて全くお影と存じております 四月二十五日当金沢に妻と二女と二人を疎開のため連れて参り今日に及びましたが本月末頃帰京の予定です 帰京後に残余の家族の居所を決定する積りですが それまでは室瀬方に居る筈です

2. 棗の件は前便申上た如き有様にて発送方法に困ってゐたわけですが 兎も角焼跡の土中に埋めてあったので助かった次第です 只今も土中にあるわけです 之れを長岡へお届けする方法に困ってゐるが 帰国の折にも持参出来ない程に汽車が余りにも雑踏でした 而し無理をしても持って来れば こんど帰京の途中に長岡へ持参出来るのにと 残念に思ふてゐるが致方ありません そこでご指示の如き便法を以て御部隊宛に発送出来るものとすれば幸都合^(ママ)ですが 帰京後何とかして今一度努力して見ます
3. 清水先生のお宅は先づ無事であると思ふが 而し 同先生は最近学校を辞めて 広島御実家にお歸りになられる様に 私に話してゐられましたから多分 それを実行されたのであるかと思つてゐます 御住所判明次第お知らせ申し上げます
4. 罹災以来未だ上野の学校には出勤申さず 金沢に参りては 意外に長引きましたが この間生活必需品の最小限度を得るために費し居りしも未だ半分も得られざる実情なれども 余り長日を過ごすわけにも参らず近日中に一単^(ママ)帰京します
5. 池袋では 作品を今後作って行く上に必要なものを土中に埋めてあったために 之等は全部助かった様です (但し未だ発掘せず) その他は浦和と鎌倉に少々疎開し得た程度にして他は全部消失です 只今当面するもので一番不便を感じ居るものは 夜具寝具一切の焼却と台所用具たる鍋釜類一切の焼失です それに靴下駄及雨具等が一物も出せなかつたことです
6. 当金沢にも最近B29 一機づゝ来襲すること 今日までに八回目を数へ居ります が而し東京の生活に較べれば安眠が出来て何処となく市民も未だゆつたりしております 只 疎開者と罹災者の雑踏の感があり 生活必需の器具其他に影も見られない様に一変してゐることは一驚するばかりです
7. 不肖はお影様で最近に到つて健康であり元気に満ちております この点 御厚情の切なるお影と思ひ 茲に乍書中感謝の

意を表します 又精神的にも少しも焼け出された
感じがありません 気分も極めて朗らかです 独り不肖のみ
でありませぬ 妻と子供も皆同様です 何れも皆さっぱりと
あきらめて何の愚痴もこぼしておりませぬ そして一切ならず
家族は皆が加藤さんを良く存じ上げてゐるので「今頃加藤
さんは何うしてゐられるか 定めし御奉公のため 並々ならぬ
御苦労もおありの事だらうと」申[し]お噂さを申上げながら
名簿帳を焼かれたので御住所不明となり 本日只今まで
何うにも御便り申上げられないことを非常に遺憾として
ゐた様な次第でした 妻よりも呉々よろしくと申しております
何卒

五月二十四日 金沢より
松田権六

14

松田権六（東京都豊島区池袋三ノ一六五七 室瀬方）昭和20年6月4日（20.6.5）葉書

前略其後は御壮健と存上候 本夕上野駅発の列車で
会津若松に行かれる知人に托して津田憲二様のお宅まで例の
棗をお届けすることになりました 何卒お序でもありません
かは知れないが何れにしろ明日のこと保し難きなれば兎も角津田
さんの処へなりとお届けすることは帝都よりも安全と考へたもの故
御多用のことは従々承知のことなれど是非共津田さんの所へ
曲げてお立ち寄り 御引取り下さる様 伏して御願ひ申候 拙宅が
焼けるときに土中の甕の中で見事に難を免れしも外筥荷筥
のまゝ埋めてあったものにて候 他の器物や目下製作進行中
のものなど数十点焼失いたし申候 何うしても長岡
への便が御座いませぬ遂に方向違ひとは思ひ乍ら
会津への便があったので之を利用せし次第なれば御承知を乞ふ

15

松田権六（東京都豊島区池袋三ノ一六五七 室瀬春二方）昭和20年6月6日（20.6.7）葉書

本朝御親書有難く拝見仕り候 赤坂の御宅も到々^(ママ)焼失な
 されし趣誠に言外の消息と感申候 不肖五月二十六日帰京以
 来雑務に追われ居り候 例の棗も心に掛り乍ら如何ともなし不能
 去る焼出される直前土中に埋めし為め器物は何の障りも無く
 保存され大火の中に無事を得たるを幸ひと存居る次第にて候
 而る処其後長岡へ送るべき方途無之為めに日夜心痛
 知人某氏がたまたま若松に行くのを利用し数日前に初
 めて土中より掘出し之を托して一先づ津田憲二さんのお宅まで
 届けて貰ふことに致申候間何卒お含み相願度存候 多分
 暇もあるまいとは存申候も東京に置くよりも安全と存候まゝ
 右の如き処置を取りしもの故御容赦相願度候 多分六月五日
 中には津田宅に届けられている筈なれば何とかして長岡の方へ
 お序での節お運び下さる様に御骨折り相成度候 右用々のみ匆々

16

松田権六（東京都葛飾区新宿町三丁目二九七六 吉野富雄宅）昭和20年7月15日
 (□.7.17) 封書

謹啓時局緊迫の折愈々御清勝賀申上候 陳者不肖
 其後はお影にて恙なく愉快に過し居り申候 七月一日付を以て東部
 第六部隊本部付と相成り第三補充隊付となり 更に同日付を以て深川工
 業学校（電気学専門校です）軍事教官に配属され 同校及同校学生
 の動員勤務先きたる江戸川区内電気器具製作株式会社岡野工場へ
 の教練教官を受持つことに相成り 吉野氏宅より右三ヶ所に通勤する
 ことに相定まり 之れを以て兎も角一段落の形と相成りやに思われ居り候 不肖としては
 軍事教官は誠に苦手のことにて余程一生懸命にやらぬとお役に立ち不
 申ざる様に感居る次第にて御座候 永年人に物を教へるに何事も確
 心を以て心念ある行動に出でられた過去に較べて 今回の配属将校はそれと
 全く反対に確心なき勤務にて候 而し思へば斯る確心なき者をこの際
 引き出さねばならぬ程に時局緊迫の実情と存ぜられ この上は出来得る限りの
 最善の方法を以て努力邦家の為めに奉公したき存念にて御座候

扱而 先般御東上の砌 部隊内へ御光臨下され折角拝顔の機会にも拘らずすっかり申し上げべき事を失念候為めここに申上度候外でもなく予てお預り申居り候画帖の件はあの後三枚ばかり染筆厚顔にも之を座右に置き乍ら時々楽しみに汚紙したいものと考えへて引き続き想をねり乍ら月日を過す程に 四月十三日の罹災と相成りそのまま御高覧願ふ機会もなく焼失の次第にてこの義^(ママ)早速御報告申上可き筈の処 遂々今日までそのまま放置の形と相成りこの点何卒重々お詫び申上候 右何卒御寛容相願度伏して懇願し奉候 誠に御立派な画帖をお預り申してその結果の不仕末については茲に謹而お詫び言上申上ぐる次第にて候 何時の世かは知らねどももとの筆採る自由を得ばいさゝかなりとお酬ひ奉る日もあれかしと念じつつ今日一日の公の為に過す心地にて御座候 それにつけても蓬萊の棚は長岡のお邸にて安らかな恵みに浴し居ることを無上の感謝に存居り候 又その折幾度か幾夜か奥様初め皆様のお手厚いおもてなしを受け乍らこの棚を連日組み上げさせて頂いた御厚情の日もつい昨日の夢の如くに目のあたり見へ出で来る心地にて候 匆々不昧

松田権六

棗は御入手にや否や

17

松田権六（東京下谷区上野公園 東京美術学校内） 昭和20年9月7日（20.9.8） 封書

謹啓 高堂其後御健勝何より慶賀に存上候 長岡の御尊邸焼夷爆弾の為に誠に残念に存ぜられ其他の御建物も共々に焼失の厄におあひなされ全く遺憾に存ぜられ申候 只御不幸中の幸は御一統皆々様の御無事こそ何よりと存じ候 何卒御不自由此上もなき御生活御察し申上今後共御撰養御祈申上候

降而 不肖義^(ママ) 予而応召服務中の処 本日付を以て無事解除されこゝに謹みて申告仕候 此上は一意専門の途に邁進致度と存候間よろしく御願申上候 かねての御恩義もあり参堂の上御礼方々御挨拶申上可筈の処 匆々の際とて不致

取以書中御挨拶申上度斯如に御座候 敬具

昭和二十年九月七日

松田権六

御一統皆様へよろしく御鳳声願上候

18

松田権六（東京美術学校内） 昭和21年4月22日（21.4.25） 葉書

謹啓先般御光来の折失礼申候 板谷先
生外二、三お出にて候 加藤様がお見へと申し候処
同先生もすぐお入り頂く様にと云ふわけで玄関へ出
てみた処遂にお帰りにて非常に残念に候 五月
名古屋行の件は実は御地の市役所から展覧
会の五月末と称す審査に来て呉れとの次第にて その日時の
事は追而知らせると云ひ乍ら未だ不明の次第に候
本日は誠に御丁寧に函面等相添へ御親切の程有難
く御礼申上候 何れ知らせ有之可候へばその節予報申
上度候 何卒よろしく御願申上候

名古屋市役所経済局商工課林谷龍奎と申す方より交渉有之ものにて候

19

松田権六（東京美術学校内） 昭和21年4月30日（21.4.30） 葉書

前略

七月二十九日頃の予定と申
奉り候間 何卒その頃
御配慮申可候につきよろしく
御願申上候

20

松田権六（金沢市桜島二ノ一四） 昭和21年8月13日（21.8.□） 封書

拝啓

お暑にも抱らず愈々

御健勝にて誠に慶賀

至極と存上候

御多用の折連日の滞

留にて非常なるご迷惑

御掛申候にもかかはらず何

に彼と御配慮頂きお影

にてゆっくりした心地にて楽しく

過ごし候 茲に不取敢以書中

御厚情に対し御礼申上候

御立派な工場を参観して大

ひに参考に御座候

加藤□司殿へ御特に

よろしく御伝へ下され度候 不肖

金沢の用事に手間取り□□滞

在□有候 先は御礼まで斯

如に御座候 敬具

八月十三日

松田権六

21

松田権六（東京下谷区 東京美術学校内） 昭和21年10月20日（21.10.19） 封書

謹啓 秋冷の節高堂愈々

御清栄慶賀至極にて御座候

此度不肖帝国芸術院会員

に推挙されたるに際しわざわざ

ご丁寧なる御祝詞を忝ふし

誠に御厚情の程 謹みて深く

御礼申上候 御承知の如く生来
不稟且つ不勉強にて候通り
のものなれば不計も今回身に余る
推挙に預りし事は全く
高堂のお影にて何に彼と普段
の御支援御鞭撻の賜以外
には無之 茲に心虚くして
予ての御同情御声援に対し
御礼の言葉を申上ぐる積りの
処却而逆に御祝詞を頂戴
する様な後手を踏み候事
申訳もなくと存候 今更乍ら
普段の御同情御厚意に対し
深く感謝の意を表し謹みて
御礼申上候 先輩諸先生方の
多士オ々^(ママ)お在りに鑑み不肖如
き自づから実力に恥ずるもの候
会員末席を汚すに到るは
甚だ不本意とする処にして
一応御辞退の意を漏らし候
へども兎も角も先輩会員の
多数投票の結果なればとの
事にて従ひ申候次第に御座候
到底会員たるの実力なき身
には間違いもない事故 この上は
乍微力せめて努力を注度く
と存候間 何卒倍旧の御鞭
撻御同情を切に懇願し奉る
ものに御座候 敬具

昭和二十一年十月二十日

松田権六

奥村土牛先生は左記を本拠としその他は何れも点々たるものらしく候
長野県南砂久郡白田町六〇

22

松田権六（東京美術学校内） 昭和22年1月1日（22.1.3） 封書

新春奉賀申上候

時局下何に彼とお骨折りの

事とお察申上候

昭和二十二年正月元旦

東京美術学校内

松田権六

23

松田権六（東京 台東 上野 東京美術学校内） 12月16日（□.12.16） 封書

拝啓 其後□□御無沙汰にて誠に失礼申上候

御尊翰只今なつかしく拝誦仕り候 益々御健勝にて邦家の
為日夜御奮励の程慶賀至極に不堪 殊に長岡の
御尊邸各位におかれてもお揃へ御勇健の由何よりと存上候 降而小生
一族お影にて無事消息 元気に□有候間乍慮外御放神願上候
恩師 清水南山先生御他界の義^(ママ)は御書翰の趣き全くにて
御座候 先生は技術も去ること乍ら徳望の師として仰がれた仁者
にて技芸に長ずるもの必らずしも徳行ありとなし難き我美術界
に於て技も人も兼ねられた点に於て珍らしき方と仰ぎ候次第に御座候
広島から上京されたのは九月初旬かと記憶候 日展審査には二回
病を押して出席なされその折に久し振りにてお言葉も交はし申候
これが今世のお分れのお言葉と思へば寂しくも亦ゆかしくも感ぜ
られ申候 不肖には特に会員として大いに自重して貰いたいと言
改まった態度にて御注意下されたそのときの先生の態度そぶりが何
を意味するにせよ 永い間眼をかけて下された御心の現はれとして
今にその時の相様がまぶたの中にはっきり残り居り候
多分不出品問題などが世上やかましかったので その雰囲気に巻き
込まれてはいかぬといふ意味であったとも判じてゐるが、実はその真意
の程がいまにしっかりつかめないまゝ、何れ審査でもゆっくり終ってから
機会を得てその時の真意を伺ふつもりでゐたが 遂に そのまゝとなった

次第 病重しとは聞きしも必らず今一度御快復^(ママ)とのみ奉へ居り 病後のことについて小生など考へ居りし相談も致し居る程に最後と相成りしは遺憾至極御座候 今年のお作を会場で拝見したのが恐らく先生の最後の作と存ぜられ候 御家族は広島から急報により御上京されたとの故 広島の方も只今そのまゝと相成ることにて候

板谷先生は審査期間中御一所にて極めて御元気その後のお話では田端の新築宅が既に出てゐるので十二月中に引越すつもりなるが今一窯たいてから上京するといふお話でした 多分引越や何かで大多忙中と存じその為めにお返事も出来ないでゐるかと拝察に御座候 何卒御越年御芽出度を祈上候 匆々

十二月十六日
松田権六

24-1

松田権六(東京 台東 上野 東京藝術大学 美術学部内) 昭和24年9月16日(24.9.19)
封書

先般御光来下され風情無之失礼申しました
その節お話の件 即刻 前田家へ手紙を以て
図示致し御返事をお待ち申しの処 本朝同封
の如きに参りし間曳覧申上候
何時も御元気慶賀に不堪候
吉野殿もお会ひ出来たと喜居られ申候
取急ぎお返事のみ 匆々

十六日
松田権六

24-2

前田利建（鎌倉市長谷二一五） 松田権六（東京都台東区上野公園 東京藝術大学 美術学部内） 昭和24年9月14日（24.9.14） 葉書 書簡24-1同封の葉書

御手紙拝見致しました。御話のゴーギャンは家の分でない事だけは明らかです。小生かつて（戦前）上野美術館にて松方コレクションの折それにてたものを見ました。たゞしそれはタビチ以前の作と云ふ事でした。たしか屋根が赤かつた様に思ひますが—。兎に角当家のものでない事はたしかです。図がらが全然ちがひます。以上簡単ながら一筆御返事致します。

九月十四日

前田利建

25

松田権六（ - ） 昭和30年2月1日（30.2.2） 封書

謹啓厳寒之砌愈々御清勝大慶至極に存候
扱而此度之件に関し即刻御丁寧なる御祝
詞を賜はり恐縮千万之次第にて厚く御礼申
上候 普段から何に彼と御支援の御陰と存じこの機
会に改めて感謝の意を表し 精進の道は一生
かと存ぜられ何卒此上とも御鞭撻の程特に懇
願申上候 先は書中御礼まで 匆々敬具

昭和三十年二月一日

松田権六 拝

釜宝様へよろしく御鳳声願上候

26

松田権六 昭和59年4月20日(□.□.□) 封書 署名以外は印刷

謹啓

春暖の候ますます ご清祥の段お慶び申し上げます。

さて、この度は不肖のため誠に盛大な米壽の祝ひを辱ふし感銘深く存じてます。

茲に謹みて厚く御礼申し上げます。

取敢えず書中にて御礼まで。 匆々敬具

昭和五十九年四月二十日「誕生日」松田権六(印)